

## 卒業ホームラン（重松清）

來住 翔太、千葉 大暉、溝口 智大、柳井 光一



## 一 作者と作品について

重松清は、一九六三年に現在の岡山県津山市に生まれた。角川書店の編集者として勤務した後、一九九一年に『ピフォア・ラン』でデビュー。一九九九年『ナイフ』で坪田譲治文学賞、『エイジ』で山本周五郎賞、二〇〇一年『ビタミンF』で直木賞、二〇一〇年『十字架』で吉川英治文学賞を受賞する。重松清は彼自身に関して次のように語っている。

言ってみれば、自分の墓碑に記される言葉——それを本人が決められるのなら、僕は「重松清」を「教師の話をたくさん書いて、親の話をたくさん書いて、子どもの話をたくさん書いた男」と呼びたい。（重松清、「せんせい。」、二〇一一年、新潮社）

この言葉のとおり、彼の作品には、現代の教育問題や家族問題をテーマに扱ったものが多い。また子どものころから吃音であり、カ行の発音がうまくなかった。彼の作品の中には、『きよしこ』『青い鳥』など吃音症をもつ人物が現れる。

その他の作品として、『流星ワゴン』『疾走』『卒業』『その日のまえに』『きみの友だち』『カシオペアの丘』『くちぶえ番長』『せんせい。』

『とんび』『希望ヶ丘の人びと』『峠うどん物語』など多数ある。

「卒業ホームラン」は、試合に出られなくても野球に真面目に取り組む小学校六年生の息子「智」を、監督と父親の立場で揺れる「徹夫」の視点から描かれている。さらに「がんばってもいいことないじゃん」いう中学校二年生の娘「典子」との関係も交えながら進んでいく構成であり、「親」と「子」の話である。もともと短編小説集『日曜日の夕刊』の中に収められた十二編のうちの一つである。これは「サンデー毎日」で連載された作品をまとめたものであるが、それについて重松清は次のように語っている。

初めての、週刊誌での連載だった。一回二ページ、四回で一話完結——という形式である。連載の注文をいただいたとき、真っ先にかんだのは、「雑誌の“間”になってみよう」ということだった。このご時世、新聞や雑誌は暗いニュースや悲観的なメッセージで埋め尽くされている。そのなかのちよつとした隙間を見つけて、ふわつとした手触りをした、さわやかなおとぎ話が書けないか。（中略）

ひさしぶりに家族が顔をそろえた日曜日の夕食時、ちよつと照れくさくなったお父さんが、「えーと、夕刊は……」とつぶやきながら食卓のまわりを探しかけて、ああそうか、と苦笑して顔を上げる。ぎこちなく、滑稽で、けれど悪くない気分の“間”である。ぼくの

書くお話も、そんな“間”のような居場所を見つけられたら——と願いながら、十二編のお話を書きつづけたのだった。(重松清、日曜日の夕刊、二〇〇二、新潮社)

そのように意識されて書かれた作品の最後、十二編目として位置づけられた「卒業ホームラン」は、ゆく二〇一一年に、重松が東北の大震災の被災者に対して少しでも役に立てないかと考え、刊行された自選短編集表題作品として収められ、さらに表題作として扱われたことから、彼自身の「卒業ホームラン」への愛着を感じる。

なにかできないか。ほんの小さいことでも役に立てないだろうか。そう考えているときに、自分の書いた昔のお話が「オレたちがいるぞ」と声をかけてきたような気がしたのです。

その声にハッパをかけられてつくったのが、『卒業ホームラン』『まゆみのマーチ』です。ともに「自選」という形で、特に愛着の強いお話を集めました。(中略)

『卒業ホームラン』と『まゆみのマーチ』の場合は、それに加えて、読者一人ずつの胸の中にある「東北」や「家族」の幸せな風景が浮かんできてほしいな、と願っています。(重松清、自選短編集・男子編 卒業ホームラン、二〇一一、新潮社)

現在東京書籍の二年生用読み物教材として教科書に掲載されており、「自分と比較しながら作品を読み、生活の中で読書に親しむ。」ことを学習の主な目標とされている。

## 二 叙述について

天気はよかったが、朝のニュースによると、午後からは風が強くなるだろうとのことだった。

午後から何か波乱が起こるといふことの伏線。

平日より少し華やいだスーツを着た天気予報のキャスターは、「行楽にお出かけのかたはセーターを一枚余分に持っていていかれたほうがいいかもしれませんね。」と愛想よく笑っていた。

「華やいだ」という言葉や、「セーターを一枚余分に」というキャスターの言葉から、季節は春先である。

「ねえ、お父さん、春一番かなあ。」

スポーツバッグの中身を点検しながら、智が言った。

「点検」とあることから、中身を一つ一つ入念に見ている。これから智にとって大切なことが控えている。

「どうなんだろうな。」と徹夫は首をひねり、使い込んだノートに〈風の可能性あり。〉と走り書きした。

徹夫は午後から風が強くなることを気にしている。ノートにわざわざ書くということは、風が影響するかと考えている。

表紙にサインペンで書いた〈富士見台クリップパーズ 第六期活動記録〉の文字も一年間でずいぶん色あせた。

富士見台クリップパーズというチームは結成してから六年目というこ

とがわかる。

少年野球チームの監督を引き受けてから、六年がたった。

富士見台クリップーズとは少年野球のチーム名である。徹夫はそのチームの監督で、結成当初から引き受けている。

三十代の後半は、ほとんどすべての日曜日を河川敷のグラウンドで過ごしてきたことになる。

徹夫は四十歳前後であることがわかる。

チームが結成されたころには小学校一年生だった智も、来週、卒業式を迎える。

智は小学校六年生。作中の時期が、三月半ばの日曜日ということがわかる。

長かったような気もするし、あつという間だったようにも思う。

「長かった」や「あつという間」から、監督としてチームの結成時からのことを思い返しての気持ち、もしくは親として智の成長を振り返っての気持ちの両方を取ることができるとは。

智はスポーツバッグのチャックを閉め、そばに置いていた金属バットを手を取った。

智も野球をやっていることがここで初めてわかる。

庭に出た智と入れ替わりに、妻の佳枝がキッチンからリビングに顔をの

ぞかせた。

偶然入れ替わる形になったのか、智が出ていくタイミングを見計らっていたのかわからない。しかし、後述の会話内容を見る限り、後者の可能性が高い。

「ねえ、あなた……。」

「……」とあり、何か話しにくいことを言おうとしているというふくみを持たせている。あるいは、途中で会話を遮られたとも考えられる。

「難しいよ。実力の世界だからな。」

妻のセリフの途中にこのセリフを被せたと考える。まだ尋ねられていないのに返答している。最後まで話を聞かずとも、妻が何を言わんとしているか徹夫にはわかる。以前にも同じような切り口で話しかけられたのではないだろうか。

徹夫がぼつりと返すと、佳枝は「智のことじゃないわよ。」とため息交じりに言った。

「ぼつりと」とあるので、前述の言葉は妻に向けてのものであるが、自分自身への言葉とも取れる。

妻のため息は、自分と夫の間で会話が成り立っていなかったことへの落胆。

「なんだよ。」拍子抜けした思いが、声を不機嫌にしてしまう。

徹夫は智のことを考えており、妻も自分と同じことを考えていると

思っていたので拍子抜けした。また、野球チームの活動前ということもあり、野球以外のことを考えたくなかったため、他の話題を持ち込んだ妻にいらだちを覚えたのかもしれない。

中学二年生の典子の様子が、秋ごろからおかしい。

約半年間、様子がおかしい。

担任の教師によると、授業中もぼんやりと窓の外を見ているだけで、ひどいときには教科書を開こうとすらしないのだという。

娘の様子がおかしいのは、家族だけでなく学校の先生も気づいている。「のだという。」という表現から、学校での様子を徹夫も佳枝も把握しており、そのことが夫婦間での悩みの種となっている。

難しい年ごろだというのは、分かる。

親として娘を気にしていることがわかる。

しばらくは扱いづらだろう、とも覚悟していた。

様子がおかしくなった当初、思春期の娘なので、扱いづらいことも出てくるだろうということは予想していた。

だが、親や教師に反抗するのではなく、一年後に迫った高校受験のプレッシャーでいらだつのもなく、今自分がいなければいけない場所からさらりと立ち去っていくような態度が気になってしかたない。

「気になってしかたない」とあるので、気にしないようにしようと思っただけでも気になってしまうということが分かる。典子のおかしさ

は、自分が予想していたおかしさとは異なるものであった。気になりつつも、親としてどうすればいいのかわからない。

冬休みに、一度きつくしかった。

「きつく」とあるので、普段叱る以上に、厳しく叱った。きつく叱れば態度も変わるだろうと期待していた。

だが、典子はたいして悪びれもせず、「来年は受験なんだぞ。」と繰り返す徹夫をむしろ哀れむように見て、言った。

しかし、典子の態度は変わるところか徹夫の予想外の返事が返ってきた。「たいして」とあるので、あまりおどおどした様子はなかった。

「がんばったら、なにかいいことあるわけ？その保証あるわけ？」と続け、徹夫が返す言葉に詰まってしまうのを見込んでいたように、「ないでしょ？」と言った。

徹夫は「がんばればいいことがある」と言っている裏で、心の中では「がんばっても報われるわけではない」と思っている自分がいた。

ここでは、そんな自分を見透かされているような言葉が出てきたので、返事につまってしまった。

そのときの、まるで幼い子どもに教え諭すような口調は、今も徹夫の耳の奥に残っている。

それほど、典子の返事は徹夫に衝撃を与えた。この返事が、現在の、どうすればいいのかわからないという状態を作り出すことになった。

がんばれば、いいことが——「ある。」とすぐに言ってやらなかったのは、親として間違っていたかもしれない。

親としては、典子のように無気力状態にならないように励ましてやらなければいけないと、後になって思った。「かもしれない」とあるので、いずれにしても自信がない。

それでも、今もう一度同じことをきかれても、やはり言葉に詰まってしまおうだろう。

「やはり」とあるので、一度冷静になった今でも、どういう言葉をかけてやればいいのかわからない。それほど、典子の言葉は徹夫を困惑させた。

「ある。」と答えると、うそとまではいわなくとも、なにか大きなごまかしをしてしまうことになるだろう。

ごまかしになってしまおうという具体的な事例に心あたりがある。

いつものことだ。

「いつも」とあるので、最後の試合ぐらい自分の子を使ってほしいというお願いは、毎年この時期になると聞くことが多いのだろう。

ふざけるな、と監督として思う。

普段の練習を見ているのは自分だし、自分の中でチームの構想は出上がっている。そこに情を挟んでしまうのはよくないことであるという監督の立場からの感情である。

だが、父親として立場を入れ替えてみると、その気持ちも分からないではない。

対して、親という立場で考えてみると、自分の子どもが活躍する場面を見たいという気持ちも分かる。

徹夫は顔をしかめ、それを悟られないよう、棒読みのような口調で言った。

「棒読みのような」とあるので、親・監督両方の立場がわかる分、どうすればいいのか葛藤している。

バットを上から振り下ろしてボールを地面にたたきつけるんだ、と何度言っても、アッパースイングの癖は最後まで直らなかった。

アッパースイングの癖を直そうと、智と徹夫はがんばってきたのだろう。しかし、どうがんばっても癖は直らなかった。典子の「がんばったら、なにかいいことあるわけ？その保証あるわけ？」という言葉は、智のことを指しているのではないかと徹夫は考えてしまったのではないだろうか。前述した具体的な事例とは、智のことを指している。「最後まで」とあるので、今日の試合を最後までと考えている。

ノートには、日曜日ごとの練習や試合の記録が細かく書きつけてある。「細かく」とあるので、監督として、毎週の記録は欠かさず記入している。

今日が二十試合目——智たち六年生にとっては最後の試合になる。

今日の一戦は、徹夫、子どもたち、子どもたちの親にとって特別な



試合である。

結成以来のメンバーだ。一年生のころから鍛え抜いてきた。

小学校入学から卒業まで見てきたので、第六期のチームには思い入れが強い。

そのかいあって、戦績は十九勝〇敗。

一年生のころから鍛え抜いてきたことが、結果として表れている。

ずば抜けた選手がいるわけではなく、試合はいつも接戦になるが、それをものにする粘り強さがある。

頭の中で、第六期のチームの特徴を粘り強さだと把握できている。

その特徴を生かして、勝てるような采配をしてきた。その結果が、全勝につながっている。

ここまで来たら、全勝のまま小学校を卒業させてやりたい。

監督としての願い。勝たせてやるのが監督の使命だという気持ちがある。

それが六年間がんばってきたことへのなによりのごほうびになるはずだ。

自分の子を使ってほしいという願いをされたときに、「ふざけるな」と思ってしまったのは、何としてでも勝たせてやりたいという気持ちが強かったからであろう。

補欠組もレギュラー組と分け隔てなく練習させ、試合のときにはピンチヒッターやピンチランナーでなるべく出番を作ってやるように心がけてきた。

分け隔てなく接して、すべての子どもにも平等にチャンスを与えてやるというのが、徹夫の監督としての信条である。

十六人いる六年生の、しんがり。

「しんがり」から、智が、十六人の内で一番下手であるということが分かる。

公平に実力を判断した結果だった。

「公平に」とあるので、六年生だから出してやりたいがために決めたのではなく、実力的に背番号一六が妥当であると考えた。



いや……ほんとうに公平に見るなら、智よりもうまい五年生は二、三人いる。

「ほんとうに公平に見るなら」とあるので、公平に判断しなかったということがわかる。智よりもうまい五年生たちではなく、智はこれが最後のチャンスであるので、どうしても出してやりたかった。

痛いほどわかっている、そこまでは監督に徹し切れなかった。

「そこまで」とは完璧な実力主義をつらぬくまで。「徹し切れなかった」とあるので、父親として、智を試合に出させてやりたいというきもちが、監督としての公平な判断に勝ってしまった。

父親の自分を少しだけ残してしまった。

監督として徹しきれなかった。「しまった」とあるので、そうするつもりはなかったのだが、意思に反してしてしまった。

まだパジャマ姿だった。

「まだ」ということは、本来今の時点でパジャマ姿であるべきではないと考えている。

むっとしかけた徹夫をいなすように、典子は庭に目をやって「智、張り切ってるじゃん。」と言った。

「いなすように」とあるので、典子は自分の話をされると面倒であると考えていたのだろう。

「最後の試合だからな。」気を取り直して返す。

「気を取り直して」とあるので、むっとしかけた自分を抑えている。

「模試に行かないんだったら、応援に来るか？」

応援に来たら、典子の何かが変わるかもしれないと期待しているのかもしれない。

典子の声に、父親をとがめるような響きはなかった。

「とがめるような」とあるので、責めるようなということ。とがめられるかと予想していた。

ごく自然な言い方で、だからこそ、胸が痛む。

「ごく自然な言い方」とあり、徹夫もそんなことは何度も考えている。それほど誰しもが素直にそう考えること。「だからこそ、胸が痛む」とあり、誰もが思うそんなことをしてやれない自分に胸が痛むのだ。

「実力の世界だからな。」徹夫は言った。

試合に出られないのは、智の実力のせいであると考えている。

「試合に出ることだけが野球じゃないんだ。」

試合に出るといふことだけのためにがんばっているわけじゃないし、試合に出ないとそのがんばりが報われないというわけでもない。

屁理屈だ。

それとこれとはまた、話が違う。がんばった結果がどうなろうと、そのがんばった過程が大事だと言っただけで、勝っても負けてもどうでもいいということにはならない。

「努力がだいいじで結果はどうでもいいって、お父さん、本気でそう思ってる？」

本当はそう思っていないでしょ、という確信がありつつ聞いている。

徹夫は黙って、小さくうなずいた。

「黙って」とあり、何もいうことができない。「小さく」とあるので、自信のなさが表れている。

新チームのエースになるはずの五年生の長尾君を控えに入れておくべきかもしれない。

となると、誰か一人、ベンチ入りする予定だった子Ⅱ智をベンチから外さなければならぬ。

「はい……すぐに。」

「……」とあるので、どうすればよいか迷っている様子が分かる。

主審に促され、補欠の欄のいちばん下に〈加藤〉と走り書きして渡した。

「走り書きして」とあるので、少し投げやりな行動であることを表している。

メンバー表の〈加藤〉を二重線で消して、横に〈長尾〉と書き込んだ。

父親としての徹夫が消え、監督としてチームを勝利に導くために全力を出さなければという念がこみ上げてきた。より勝利に近づぐために長尾君をメンバーとした。

高校時代を振り返って、徹夫は思う。

高校時代におそらく野球部だったのであろう。

負けず嫌いの性格だった。

野球だけでなく、勉強でも他のスポーツでも、負けたくないから必死に

がんばってきた。

徹夫の性格や考え方がわかる部分である。

それが報われたこともあつたし、報われなかったことも、もちろん、ある。

「もちろん」とあることで、報われない頑張りがあることを前提として述べている。

がんばればいいことが——「ある。」とはやはり言えなくとも、「あるかもしれない。」くらいなら典子に言ってやれるかもしれない。

「やはり」から、何度考えてもそう言い切れる根拠が見つからないでいることがわかる。また、「かもしれない」という曖昧な表現を重ねることで、典子が聞き入れてくれるのかどうか、また、自分が典子に言ってやれるかどうかの不確定性が浮き彫りになっている。

「いいことがあるかもしれないから、がんばる。」と言葉を並べ替えてもいい。

前述のような思いもあるが、なんとか自分の考えや経験から、典子にメッセージを伝えようと考えている。

だからこそ、本音を言えば、徹夫にはよく分からないのだ。

「だからこそ」ここまでの徹夫の考えを踏まえている。

「いいことがないのに、がんばる」智の気持ちだ。

「いいことがない」とは、ここでは試合に出られないということ。



監督としても、親としても、それは決して口にはできないことなのだが。

双方とも、選手を、息子を頑張らせる立場にあることが分かる。

まずいぞ、と思う間もなく江藤君は投球動作に入った。

試合が劣勢であることを示している。また、この前後の文では、短文を連続させることで切迫感を出すとともに、試合の展開をスピーディーに伝えている。

左中間にライナーで飛んだ打球はぐんぐん伸びて、レフトの前島君の差し出すグローブのはるか上を越えていった。

「ぐんぐん」「はるか上」という表現から、クリップパーズからすれば絶望的な打球であったことを強調している。

五回の裏を終わったところで○対八。

もう勝つ望みの薄いことを、残された回の少なさ、点差により、伝えていく。

ショートの前島君の父親が小走りにベンチ裏に来て、言った。

「小走りに」とあるので、やや急いでいる。

「もう試合の勝ち負けはいいですから、補欠の子もみんな出してあげましょうよ。せつかく今までがんばってきたんですから。」

急いでいた理由が、補欠全員を出せるようにという配慮だった。「今まで」というのは、今ベンチにいるのは全員六年生であることから、

最長で六年間である。

徹夫は黙ってうなずき、帽子を目深にかぶり直した。

「かぶり直した」という表現から、勝つことよりも、全員で最後を締めくくりに切り替えた徹夫の様子がうかがえる。

この試合なら、智を出してもだから文句は言われなかった。

このような大差の負け試合ならば、という意味。序盤に出てきた表現とも呼応する。また、「文句は言われなかった」という表現から、このような試合でなければ文句を言われる、という状況であることが分かる。つまり、上手でない智を試合に出すことは、父親としての最良であると断ぜられるということである。

あいつの努力を最後の最後で無駄にしたのは、おれだ。

父としての徹夫の言葉である。「無駄にした」というのは、補欠にも入れなかったことを指している。

後悔はしない。

ここは、監督の立場からの思い。

それでも——おれは智の父親として、この監督のことを一生許さないだろう。

頑張った先の「いいこと」をフイにってしまった後悔や、自分への怒りを表している。

一家の声援を受けて、ツースリーまで粘ったが、最後は空振り三振。

「一家の声援」というのは、序盤にもあるように、祖父母も含んでのことであろう。ツースリーというのは、塁に出られるか出られないかのギリギリのところであり、山本君がよく粘ったことを表している。

思い切りスイングをしてよじれてしまった背中の一四の数字が、一瞬、智の背負った一六に見えた。

智を試合に出してやりたかったという思いの表現。

悔しそうな顔で引き上げてくる山本君に、ベンチの横から励ましの声が飛んだ。

「ベンチの横」とあることから、メンバーに含まれていない部員ということがわかる。

「惜しい惜しい、ナイススイング！」

「惜しい」を二回繰り返していることで、ツースリーまで粘り、本当にあと一步であったことを強調している。悔しさをにじませる山本君への励ましをより強めようとしているのである。

智だった。徹夫と目が合った。

試合前の様子など、メンバーを外れてもまじめにひたむきに取り組む智が描写されており、ここで声を出したのも智ではないかと予想する読者も少なくない。ここではその裏付けの意味合いもあるか。また、深読みではあるが、声に反応して智の方をつい見てしまった（ここではおそらく父親の）徹夫の心情も推し量れるのではないか。

智は、元氣出さなくちゃね、というふうにはほほえみ、うつむいて、もう顔を上げなかった。

一貫して描かれている、智のひたむきな性格から、試合中であることを意識し、ほほ笑むが、やはり試合に出られない悔しさも出してしまう、小学生の幼さも描いている。

試合が終わった。〇対十の完敗、いや、惨敗だった。

「いや、惨敗だった」と言いなおすことで、試合の結果がいかに惨憺たるものであったかを読者に印象付ける効果がある。

母親どうしのおしゃべりの輪から少し離れた所にぼつんとたたずんで、こつちを見ていた。

六年生の中で、唯一智がメンバーから外れており、周りの母親にも気を遣ったのか。

誘っても来なかったというより、最初から佳枝が誘わなかったのかもしれない。

朝の様子、最近の典子の様子を見て、来ないことを、徹夫も佳枝も予想していたのである。

今日の試合だけは、見られたくなかった。

大差で負けたが、智を出すことのできた試合である。それを、メンバーから外すことで出られなくしてしまった徹夫にとって、「やはり頑張ってもしょうがない」と強く典子に思わせてしまいかねない。「だけ

は」としていることで、それがより強調されている。

天気予報より少し早く、試合が最終回に入ったところから風が強くなっていった。

朝のニュースの話題をもう一度提示している。「ニュース↓家族の会話」の流れは作者の意図的なものか。

加藤——と呼びかけて、試合はもう終わったんだと思い直し、父親に戻った。

チームの活動のときは、名字で呼んでいることがわかる。折に触れ、父と子でありながら、監督と部員でもあるこの関係性の中で、徹夫はそれを意識している。「思い直し」という言葉から、ここでもこの様子がかがえる。

智は一瞬きよとんとした顔になったが、すぐに「オッス！」と帽子を取って答えた。

「きよとん」という表現から、智は驚いていることが分かる。しかし、それが急に呼ばれたことに対してなのか、名前で呼ばれたことに對してなのかはわからない。しかし、「オッス！」や「帽子を取って」という表現が野球部部員としての言葉・行動であることから、智が「部員」として「監督」の徹夫に接していることがうかがえる。

ベンチに座って、敵も味方も観客も引き上げたグラウンドを徹夫はぼんやりと眺めた。

もう誰もグラウンドに残っていない。「ぼんやりと眺めた」とあるこ

とから、敗戦について、それから、智に話す内容について思索しながらベンチに座っている。

「お父さん。」隣に座った智が言った。

この時点では、すでに「息子」の智に戻っている。

「いいの？もうすぐ打ち上げ始まつちゃうんじゃない？」

最初から企画されていたのかはわからないが、打ち上げがあることがここで初めてわかる。智も知っていることから、子どもたちも参加できるような形式のものか。

徹夫は笑いながら言って、緩んだほおがしほまないうちに続けた。

「緩んだほおがしほまないうちに」から、徹夫がこれから話す内容を、できるだけ暗くならないように話そうとしていることが分かる。

声は明るかったが、顔はさっきと同じようにうつむいてしまった。

試合に出せなかったことを悔やむ徹夫と、それよりも試合結果に言及した智の会話の場面。自分のことよりチームのことを、という智の性格の表れか、もしくははあえて自分が出られなかったことを話題にすまいとしているのかもしれない。前文「いいってば」の表現は、毎試合同じような話をしているか、もしくは、「声は」の文から、前述のように自分のことが話題に上ってしまい、気丈に振舞おうとしたのかもしれない。

徹夫と反対側の隣に座った佳枝が、智の肩越しにこっちを見ていた。

智と一緒に佳枝も残っていたことがわかる。

目が合うと、しようがないわよ、と小さくうなずく。

徹夫の気持も智の気持も察しての表現か。

あてもなく自転車を走らせ、暇をつぶすだけのために本屋やCDショップをのぞく典子の姿を思い描くと、腹立たしさよりも悲しみのほうが胸にわいてくる。

試合が終わってからここまでの間に佳枝から典子のことを聞いたのであろうか。マイナスの表現（あてもなく、だけの、悲しみ）を使うことで、失望感のようなものが読み取れる。

そう信じていられる子どもは幸せなんだと、今気づいた。

「今気づいた」の表現は、典子のことを思った今気づいた、という意味か。

大人になって「お父さんの言っていたこと、うそだったじゃない。」と責められてもいい、十四歳やそこらで信じることをやめさせたくはない。信じることのできない典子に対する徹夫の思い。また、頑張り続ける智にも、という思いもあるか。

だが、そのために何を語り、何を見せてやればいいのか、分からない。

現時点で、徹夫が苦心していることの答えは、まだ出ていない。

「中学に入ったら、部活はどうするんだ？」

卒業式が来週に迫っており、中学入学も近い。さらには、六年間通して続けてきた野球が、最終戦を終え、一区切りがついたため出てきた言葉である。

答えは間をおかずに返ってきた。

「間をおかず」という表現から、智がはつきりと野球部入りの意思を固めていることがうかがえる。

「ほら、サッカーとかテニスとか。」

野球ではベンチ入りも果たせなかった智に対し、佳枝も心配していた。具体的に「サッカー」「テニス」と提示することから、智に選択肢を増やすという心遣いが分かる。

だが、智には迷うそぶりもなかった。

「迷うそぶりもなかった」から、佳枝に他の選択肢を提示されてもなお、野球部にするという意思が全く揺らがないことがわかる。

「いいよ。だって、僕、野球好きだもん。」

この作品の核心と言っても良い部分。徹夫にはつきりと言われ、なおも同じく野球が好きであるという智の意思が、重ねて伝えられている。

一瞬言葉に詰まった後、徹夫の両肩から、すうっと重みが消えていった。

「一瞬言葉に詰まった」から、智の言葉に対し、徹夫が驚いていることがわかる。また、ここでいう「重み」とは「本音を言う」と智の気

持ちがわからない」という徹夫の悩みであり、智が試合に出られなくともひたむきに頑張る理由を聞いたことで、それが解消されたことを示している。

ほおが内側から押されるように緩んだ。

「緩んだ」とあり、先ほどの「緩まないうちに」と意識せねば表情が固くなってしまっていた表情と対比される。

拍子抜けするほど簡単な、理屈にもならない、忘れかけていた言葉を、久しぶりに耳にした。

「拍子抜けする」とは、張り合いがなくなること。この場合、気が抜けるというのは、落胆やがっかりなどマイナスなものではない。自分が今まで悩んでいたことに対してあまりに「簡単な、理屈にもならない」答えを「智」が出したことに對して、肩の力、全身の力が抜けるという、「肩の荷が下りる」というようなプラスの意味合いに近い。

「忘れかけていた」ということは、身に覚えはある。それは、自分の子どものころを指すのだろうか。

智の返事を待たずに、試合で使わなかったままさらのボールをグローブに収め、マウンドに向かってダッシュした。

「智の返事を待たずに」とは、「智」の反応は待たない、半ば強引な行動である。「智」を試合に出すか出さないかで決断をなかなか決められなかったときは違い、決断した意思の強さを感じる。

風はホームベースから外野に向かって吹いている。

冒頭の「午後からは風が強くなる」という部分が、ここで影響を与えている。

智のアップスイングなら、うまくいけば一発打って一発の割合だろうが、風に乗って外野の頭を超えることもあり得る。

「一発打って一発」の割合は0・1%である。到底信用できる確率ではない。これを「うまくいけば」とし、「あり得る」とあくまで、無理やりと感じるほど肯定的にとらえようとしている。

それを親が信じてやらなくて、だれが信じるというんだ……。

「徹夫」は「父親」としての自分を強く意識している。「一発打って一発」という到底信用できない確率を、強いて肯定的にとらえようとする「徹夫」の姿を通して、「親だけは、自分の子どもを信じてあげなければならぬ」というメッセージが込められている。

はにかんだ様子で何度か素振りした智は、小さく一礼して打席に入った。

「はにかんだ様子」とあるので、母親が守り、父親が投げる、という状況に恥ずかしさ・照れくささを感じている。それでも打席に入るときに、一礼をする姿勢は「智」が野球に真面目に取り組んでいることを感じさせる。しかしその一礼は「小さく」なっているのはやはり、「智」の「はにかんだ」恥ずかしい、照れくさい感情からである。

「返事が違うだろ、腹に力を入れて。」

父親の口調から、監督としての口調に変化している。返事が違うというのは、いつも練習でしている返事の仕方とは違うということ。そ



れを意識させることで「智」にとっては気持ちを切り替えるきっかけになる。

例えば山なりのスローボール、そんなものを投げるつもりはない。

「智」に打ちやすい球をなげてあげよう、という気持ちは一切ない。

レギュラー組の打撃練習のときと同じように、速球を投げ込んでやる。

むしろ、レギュラー組でない「智」に対して、「智」にとっていつもの練習以上の球を「智」のために投げ込む。

それが、野球が大好きな少年に対する礼儀だ。

「野球が大好きな少年」とは、「智」のことである。息子ではなく、野球を愛する少年に対して、自分も野球をやってきた身として、ここで甘い山なりのスローボールを投げて打たせてあげることは失礼なことだとし、いつもの練習以上の速球をなげることが熱心に野球に取り組む「智」に対する敬意であると思っている。

しかられて悲しいんじゃない、打てないのが悔しいのだ、と伝えるように、徹夫に投げ返す球は強かった。

半べそをかくほどの、打てない「智」の悔しさは心の中では処理されず、投げ返す球にそのくやしさをぶつけている。最後の試合でベンチに入れなかったのにもかかわらず、「長尾君に笑顔で接」し、「ベンチかの横から励ましの声」を飛ばすなど、「智」は自分の悔しい気持ちを表に出さなかったことを考えると、この「打てないのが悔しい」という感情の大きな高ぶりを感じる。

「智、今のホームランだよ！ホームラン！」と何度も言った。

「！」や「何度も」とあることから、必死に「佳枝」が「智」に呼びかけている様子が分かる。「今のホームランだよ！」という言葉は、明らかにホームランではない打球になった「智」への励ましである。

徹夫も少しためらいながら、右手を頭上で回した。

「ためらいながら」とあることから、明らかにホームランではない「智」の打球をホームランであることに抵抗を感じている。それは、「野球が大好きな少年に対する礼儀」ではないからであろう。「徹夫も」とあることから、この行動は「佳枝」の行動を受けてのものであると分かる。

打席できよんとする智に、ダイヤモンドを一周しろとあごで伝えた。

「一周しろ」と声に出さず「あごで伝えた」というのは、指示・指図という性格を持つ行動である。なので「智」のためを思っているのではなく、「ホームラン！」と言って「智」を励まそうとする「佳枝」の気持ちを気遣っていることではないかと考えた。

一方、「佳枝」の気持ちを気遣うというよりは、「佳枝」が「智」を気遣ったように、「徹夫」にもその「智」への気遣いがあったと考えることもある。

だが、智は納得し切らない顔でたたずんだまま、バットを手から離さない。

自分の打球が、ホームランではないことは明らかであり、それをホ



ームランだとすることに納得できず、ダイヤモンドを一周したくない気持ち表れている。

徹夫をじっと見つめ、徹夫もまっすぐに見つめ返してくるのを確かめると、帽子の下で白い歯をのぞかせた。

「じっと見つめ」、「まっすぐに見つめ返」すというのは、気持ちの共有である。ホームランであることを認めたくない「智」の気持ちを、「徹夫」も感じてくれていると確かめたから、安心し、笑ってみせたのである。

「お父さん、今のショートフライだよね。」

「だよね」、とは相手の同意・返答を期待する表現である。「徹夫」に対して、ショートフライであることの同意・返答を求めている。

あと数年のうちに父親の背丈を抜き去るだろう。

「数年」とすることは、数えられるほどすぐその将来を表しており、父親の背丈を抜き去る「智」の成長をすぐ近くに予感している。

アウト。

「徹夫」は「智」の同意・返答に応えた。

ゆつくりと智に近づいていき、声が届くかどうかぎりぎりの所で「ナイスバッティング。」と言った。

「声が届くかどうかぎりぎりの所」とあるので、「智」に聞こえても欲しいし、聞こえてなくてもいい距離である。決して「ナイスバッテ

ィング」ではなかったが、成長した「智」の姿を見て、ほめずにはいられなかったのではないか。しかし、ほめてしまったら「ショートフライ」と自ら言った「智」の決断に水を差してしまうから、聞こえてなくてもよいと思ったのではないか。

野球とは、家を飛び出すことで始まり、家に帰ってくる回数を競うスポーツなのだ。

「卒業ホームラン」が「家族」の物語であることと、野球を扱う物語であることの意味をここで示している。

「あなた、ほら、やっぱり来てる。」

やっぱり、とあるので「佳枝」は「典子」が来ると思っていたということを表す。「徹夫」と「智」が気持ちを共有したように、「佳枝」と「典子」にも同性ならではの気持ちの確認があったのではないか。

今なら、何かをあいづに話してやれるかもしれない。

「典子」の言葉に対して言い返す言葉が見つからなかった「徹夫」であるが、伝えることができるという気持ちを抱いている。成長したのは「智」だけでなく「徹夫」でもある。

先制点なのか、追加点になるのか、劣勢に立たされての四点かは分からないけれど。

家族みんなで、ホームインしよう。

家族全員が一つの場にそろろうという場面はここで初めてである。

## 三 考察

## (一)

「がんばったらいいことがある」のかどうか。この物語のテーマの一つである。〈典子と智のやりとり〉〈智のベンチ入り〉そして何より〈主人公である父・徹夫の考え方の変化〉によって、読者に「努力」の必要性・価値について、この作品では語りかけている。

一般的に言われるのは、「努力はがんばったその分だけ報われる」とことわざでは、「努力に勝る天才無し」などと、努力するということとは、することこそが成功への鍵であり、それには十分価値があるとされている。俵万智も「努力できるといふことも実力のうち」（俵万智、「りんごの涙」、一九六二、文藝春秋）と、結果にすら触れることなく、努力は価値のあるものだと言っている。

しかし、このように努力に対して肯定的な考えばかりが存在するのではないのもちろんのことだ。「凡人はどんなに頑張ったって天才には勝てない」「どんなに努力したって結果がいつまでもついてこない」といったふうに、自らの人生経験や価値観から「努力したって結局報われるとは限らない」「そんなもの無駄である」などと努力に対して否定的な考えを持っている人が多いのもまた事実である。

また、あわせて述べておくと幕内一步で有名な『はじめの一步』（森川ジョージ）には「努力した者が全て報われるとは限らん。しかし、成功した者は皆すべからず努力しておる」（森川ジョージ、「はじめの一步」コミックス第四二巻、講談社）とあり、読んで字のごとく、努力したからといって報われることが一〇〇％保障されているわけではないが、努力をする者にしか栄光は掴みとれないといった、前の二者

とはまた異なった視点から「努力」の価値について考えている。相田みつをの言葉には「毎日少しずつ。それがなかなかできねんだなあ」（相田みつを、「にんげんだもの」、一九八四、文化出版局）とあり、努力し続けることの難しさについてもうかがい知れる。

※（以下、考察に用いやすいように、前述した3つの考え方のうち、肯定的な考え方をまとめたものを「パターンA」、否定的な考え方をまとめたものを「パターンB」、また、そのどちらでもない考え方を「パターンC」とする。）

## (二)

さて、この作品の中では息子・智が小学一年生の頃から結成第一期のメンバーとして鍛え抜かれてきたこと、そしてそのメンバーの中でも智はしんがりであることが「努力」というテーマに対する設定として鍵となって物語の根底に存在している。その上で、話が進むにつれて父兼監督・徹夫の中で次々と浮かんで消えて移り変わる「努力」について様々な考えと、その変化を及ぼしている人々との関わりなどによって、作者が伝えようとすることを描き出している。

物語の中では結局、六年間がんばり続けた智の努力が報われることはなかった。「がんばったらいいことが」ある・あるかもしれないからがんばる、などと様々に考えていた徹夫も、結局彼自身の中ではパターンCの考え方に至るところで落ち着いている。ラストシーンでの智とのやりとりの中で〈結果がどうこうの話ではない、好きだからだがんばるだけなのだ〉という智の考え方に、徹夫は「努力」ということについての一種の答えを見出し、そこでこの物語は終わっている。パターンA、B、Cのいずれでもない「努力すること」へのひとつの

答えを筆者は物語の中に描き出している。

その他の登場人物についても見てみる。わかりやすいのは娘・典子の考え方だ。まさしくパターンBの考え方そのものである。「がんばってもいいじゃないじゃん」と、智の六年の努力が報われなかったことをひきあいに出して父へ問いかける典子であるが、父がどんな言葉を聞いても結局パターンBから離れることはない。また、努力が報われなかった智も自分と同じように、パターンBのように考え出すのではないのかとすら考えている。智の努力することに対する視点を交えて考えたとき、典子の「努力する」意義についての考えには（報われること）が絶対の必要条件として存在していることが分かる。

智のように報われるかどうかという次元から抜け出た考え方を典子は、更に言えば徹夫はできていない。しかし、物語の中で、智の「努力」に対する姿勢や考え方が、徹夫や典子の中に新たな風を吹き起こしたことは間違いない。典子についてははっきりとは描かれていないが、試合を見に来ていたことから何らかの変化・気づきがあったのかもしれないと見て取れる。また、徹夫に関して言うと、先に述べたように筆者が作品の中で描き出したかったであろう答えを抱くようになっていく。

結局のところ、「努力」が報われるのか否か、「がんばったらいいことがある」のかどうか、パターンA、Bどちらの考え方が正しいのかはわからない。どちらにも主張する側の考えがしつかりあって、どちらかを否定することなどできない。ましてやパターンCのように中庸を得たような考え方に至ると、その答えは無数に広がってしまう。

この『卒業ホームラン』では、そんな決着がつかない事がわかりきっているはずのテーマについての、考えの微妙な変化を丁寧を描くこ

とに成功している。

